

たまたま目にした記事だった。

人は悲しみに蓋をしようとして心を固くすると、同時に喜びやしあわせといったものまで入ってこれなくなるのだと。

自分の心を守るかわりに、それらのものを失うのだと。

だからほんとうは、選ぶしかないのだ。

傷つくことをおそれないでしあわせに生きるのか。

それとも、傷つかないように心を閉じて孤独の中で生きるのか。

(な、なんてこと……、何を馬鹿なことを言っているんだろう、この人は。アホではないだろうか。)

彼女はその記事をよんだときに、のけぞった。

あまりに信じられなさすぎて、それまでの気まずさも忘れはて、思わずたずねてしまった。

「どうしてちょっと頭のいいような人たちって、極端なの？ この世には、○と×しかないみたいな無茶な分類をするの？ 頭がいい人って、あたまがおかしいひとの別名？」

彼は少し離れた書棚で、調べ物をしていたが、彼女の声は聞こえたようだった。ふ、と動きをとめ、彼女の方を振り向いた。

「唐突だな」

さっきまで、あんなに不機嫌そうにしていたのに、とは言わなかった。

「あなたも、どちらかというにあたまのいいひとでしょう？なんか参考意見がきけるかと」

「どちらかというと？」

彼は、なにか奇妙なものでもみるような表情をした。

しかし、特に反論するわけでもなく、手にしていた書籍を机の上に置くと、椅子の背にもたれかかり、腕を組んで息をついた。

「ひとついえるのは、インターネットには、世界中の誰もが投稿できるということだ。よって、膨大なデータが存在している。しかし、その信ぴょう性は様々だ。キチガイでも天才でも投稿できるのだから。すべては読み手の判断に委ねられるということをおぼえておいたほうがいい」

盛大にはぐらかされた気がした。しかし、それはもっともな意見ともいえた。

「じゃ、このひとはきっと、キチガイさんなんだね。科学者って書いてはあるけれども」

彼は興味深そうに目を細める。

「なぜ？」

「だって、ゆめがないもの」

彼女はあっさり答えると、もう興味をなくしたのか、その画面を閉じた。そのままデスクから離れて、彼のもとへと歩み寄る。彼は体勢を変えず、すこしいぶかしがるような表情で、彼女をみていた。

「機嫌は、治ったのか」

自分のよりかかっているいすにすわった彼女に、彼は皮肉げな微笑をうかべた。

「うん。わたしもね、ゆめがなかったって、気づいた。反省」

言葉を区切るようにいって、彼女は自分を見下ろす彼を見上げた。

そうすると、ちょうどまんなかで、視線が溶け合った。

「……、君は、どうして」

「もどってきたの？って、訊きたいの？」

彼は返事をしなかった。そのまま顔を近づける。なぜかそうするのが自然なように思えた。

「——いつか、教えてあげる」

至近距離で見つめ合うと、彼の瞳に自分のほほえみが映るのがみえた。

いままでみたどんな鏡の中の自分より、きれいだなと思った。